

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13456

研究課題名（和文）私事化／民営化の人類学的研究：ポスト福祉国家フィンランドの親族介護とケア市場

研究課題名（英文）Anthropology of privatization: Relative care and care market in post-welfare state Finland.

研究代表者

高橋 絵里香 (Takahashi, Erika)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：90706912

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、フィンランドの高齢者ケア制度の私事化／民営化の進展状況を明らかにする為、行政の在宅介護チームにおける組織改革と効率化が現場にもたらした影響について参与観察を実施した。また、高齢者ケアをめぐる自己選択と家族・親族関係についての理解を深める為、親族介護や住宅をめぐるケアを実践する高齢者への継続的なインタビューを行った。さらに、高齢者ケアサービスに関わる技術を提供する私企業に対し、行政機関を顧客とする企業からみた公益性とケアの概念についてのインタビューを行った。こうした調査の結果、高齢者自身だけではなく、高齢者を取り巻く家族・親族・ケアワーカーについても個人化が進展していることが判明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、高齢者の日常生活を成り立たせる多様なケアの配置において企業・親族・高齢者個人が相互に関係しあう様態を理解することで、複数の私的領域間のつながりを十全に示してこなかった他の人文社会科学領域の研究に対して有効な事例とロジックを提供する点で独自性を持つ。さらに、北欧型福祉国家として知られるフィンランドの新自由主義的な方向転換について、公的に発信されている情報ではなく人々の経験を記述することは、すでに介護の商品化が進んだ日本に対し、新自由主義への軟着陸がどのような妥協点において可能であるのかという喫緊の課題をめぐる創造的な知見をもたらすものである。

研究成果の概要（英文）：In order to understand the progress of privatization within families and public eldercare organization, this study conducted participant observation on the impact of organizational reforms and optimization in municipal home care teams. In addition, I performed interviews with older adults who practice informal care and describe housing histories of the older adults to understand individual choice and family/relative relationships surrounding eldercare. In addition, I interviewed private firms that provide technology related to eldercare services about the concept of public interest and care from the perspective of a private company whose clients are governmental agencies. The results of these fieldwork revealed an increasing individualization not only of the elderly themselves, but also of the families, relatives, and caregivers who surround the older individuals themselves.

研究分野：文化人類学

キーワード：高齢者ケア 民営化 私事化 フィンランド

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「大きな政府」による北欧型福祉国家として知られてきたフィンランドは、2010年頃から新自由主義的な方向へ社会福祉制度の舵を切っている。調査地となっている当該自治体でも脱施設化、ケアワークの効率性を上げるための組織改革が推し進められるとともに、**親族介護支援制度**が強化されてきた。これは親族介護者をケアワーカーに準じる存在として扱い、給与や休暇といった労働の保障を与える制度である。こうした社会保障費抑制策を後押ししているのは、医療福祉サービスの提供主体を旧来の自治体から広域自治体へと再編成する通称 **SOTE 改革**である。この改革によって民間企業が次々とケアサービスに参入しはじめている。当該自治体でも既にいくつかの公的サービスが国内の大手企業に下請けされ、小規模な私営クリニックと老人ホームが国際的なケア・コングロマリットの傘下に入った。このような福祉国家の抜本的変容をローカルなレベルから捉えることは、地域福祉の全体像を理解するために必須である。特に親族介護支援制度の導入と民間企業の参入促進は、高齢者ケアの予算を抑制したい行政によって同時に開始されたものであり、本研究が掲げる私事化と民営化を一つの流れとして把握するという着想に至った。

2. 研究の目的

本研究はフィンランドの高齢者ケアを事例とし、**親族介護と民間のケアサービスの同時並行的な進行をエスノグラフィックに記述**することを目的とする。高齢者の日常生活を成り立たせる多様なケアの配置において企業・親族・高齢者個人が相互に関係しあう様態を理解することで、これまで民営化と私事化としてそれぞれ別個に発展してきた理論を統合する。

このような民族誌の手法に基づく研究は、複数の私的領域間のつながりを十全に示してこなかった他の人文社会科学領域の研究に対して有効な事例とロジックを提供する点で独自性を持つ。同時に、本研究は政策人類学と親族研究という人類学の新旧領域の接合を果たすものでもある。プライベート化についての人類学的研究は、2000年頃からアメリカで発展してきた。それらの研究は米国医療制度改革に関する批判的研究に端を発しているために [Morgen & Maskovsky 2003] 民営化による医療サービスの商品化と医療機会の格差拡大に着目するものが多く、家族のような親密圏に押し戻されていく私事化への関心は薄かった。一方、人類学的親族研究においては、民営化と訳されるサービス産業の拡大について論じるものは少ない。これは、そもそも親族研究が政治や社会構造といった公的領域に関する研究として発展してきたことが理由であろう。ゆえに、ケアサービスの消費という行為は、親族集団ではなく世帯のような小規模な単位において議論されてきた。

他方フィンランドでは、高齢者の在宅介護の場面で家族や親族の中から非公式の介護者が選び取られるが、この介護者は自治体に「親族介護者」として認定されることで公的性格を有するようになる。つまり**公私の混在した領域としての親族集団が、民営化されたケアサービスの受給に関与するわけであり、その過程を把握することは、公私の境界自体の変動を明らかにすることになる**。こうした視角は、社会保障制度研究という人類学の領域と、親族研究という人類学のもっとも伝統的なトピックを融合するものとなる。

そこで本研究は、北欧型福祉国家として知られるフィンランドの新自由主義的な方向転換について、公的に発信されている情報ではなく人々の経験を記述する。これは、すでに介護の商品化が進んだ日本に対し、新自由主義への軟着陸がどのような妥協点において可能であるのかと

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

という問いにつながっている。

【参考文献】

Morgen, S & J. Maskovsky, 2003 Anthropology of welfare reform. *Annual Review of Anthropology*. 32: 315-338.

3. 研究の方法

本研究計画は、フィンランド西南部の一自治体の高齢者ケアを研究対象とし、年に2か月程度の実地調査を行う。対象となるのは 高齢者個人、 親族介護支援制度に介護者として登録された者を中心とする高齢者の親族・家族、 パルガス町に進出してきたケアサービスを提供する民間企業、 医療福祉制度改革のための広域自治体化を控え、私事化/民営化を推進する自治体という4種のアクターである。その際にケアの「境界としての作用」(boundary work) [Thelen 2015]に着目する。テーレンによれば、何が「良い」ケアであり、誰がケアの担い手であることが「適切」なのかといった判断は社会構造を照らし出す。例えば親族によるケアは施設介護よりも「暖かい」と述べる時、誰が家族の成員であり誰がケアワーカーという外部者であるのかという我々/彼らの境界が線引きされる。こうした作用に着目することで**親族・家族/企業/行政の境界の所在を明らかにする**。具体的には以下の通りである。

- [1] 在宅高齢者の生活を支える広義のケアがどのように配置されているのか、家族・親族/企業/行政の分担状況を事例として採取する。
- [2] 高齢者とその家族・親族へのインタビューから、民間のケアサービスと行政組織が提供するケアがどのように認識的に区別されているのかを聞き取り調査から明らかにする。その配置において誰の意思決定が影響を及ぼしているのかという点に注意を払う。
- [3] 同町に進出した民間の介護事業について、同社に経営方針や運営手法を聞き取るとともに、実際のケアサービスの同行調査を行う。行政から民間にサービスが下請けされたことでどのような変化が生じたのか、地元の被雇用者の視点から明らかにする。
- [4] 医療福祉制度改革に向けた自治体の広域化と私事化/民営化がどのように関連しているのか、行政担当者の協力を得て、自治体の組織改革の観察・記録から明らかにする。

以上の調査で得られた質的データをもとに、ケアを通じた社会制度の線引きの過程として民族誌の記述を行う。最終的には高齢者を取り囲むケアの配置が多様な私事化/民営化の動きとどのように連動しているのかを分析する。こうした考察から、公と私が多様な軌道を描きながら地域福祉という社会秩序の基礎を築いている様態を明らかにする。

【参考文献】

Thelen, T., 2015, Care as social organization. *Anthropology Theory*. 15(4): 497-515.

4. 研究成果

フィンランドの高齢者ケア制度の私事化/民営化の進展状況について、2019年8月~9月、2020年8月~2021年9月、2022年8月、2023年3月、2023年8月および2024年2月~3月の期間に実地調査によるデータ収集を行った。(ただし、2020年~2021年は新型コロナウイルス感染症のパンデミック感染拡大が続くなかでの調査となった。特に警戒が続く高齢者向けの居住型介護施設は外部からの訪問者を受け入れ停止していたため、民営のケアホーム等での調査は

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

中止した。その代わりに、ケアをめぐる技術を提供する私企業へと調査対象を移行した)実施した調査内容は、主に以下の項目である。

- [1] 公的ケアサービスの制度改革についての調査：医療社会福祉制度改革(SOTE改革)について、地方自治体がこれまでの計画をどのように引き継いで社会サービスを運営しているのか、自治体の各部署に聞き取りを行った。SOTE改革の導入された2022年1月以降は、自治体レベルで在宅介護チームがどのように組織改革を経験したのか、聞き取り調査を行った。
- [2] 親族介護についての調査：NGOによる親族介護者支援活動を参与観察し、参加した家族介護者に対するインタビューを実施した。また、高齢者ケアをめぐる自己選択と家族・親族関係についての理解を深めるため、住宅の側面に注目して高齢者のライフヒストリーを聞き書きした。親族介護支援を受ける介護者/被介護者について、サービス利用状況の変化にともなうケア実践の調整について記録した。
- [3] ケアをめぐる技術についての調査：高齢者ケアに関わる技術を広域自治体に提供する私企業に対し、公益性とケアの概念についてのインタビューを行った。特に在宅独居高齢者をターゲットとしたモニタリング・分析を提供する私企業が、ケアという柔軟で多様な実践をどのようにとらえ、統治しようとしているのかという点に着目し、経営陣のナラティブを記録した。

こうした調査からは、当初、急速に進む民営化へ懐疑の声が投げかけられることで、民間企業の進出や公的組織の効率化にブレーキが掛けられる一方で、これまで推し進められてきた自治体の広域化や親族介護支援の流れがそのまま持続するという矛盾した状況が記録された。ただし、一部の「民営化」が停止しているあいだも、従来は地域ごとの多様性に対応する形でサービスを提供してきた行政が、技術や市場の影響下において徐々に標準化されていく様態が観察された。こうした変化は**ケア組織に対するマネジリアリズムの浸透**としてまとめることが出来るだろう。

ただし、ケアサービスにおけるマネジリアリズムの受容は、サービス現場の臨機応変的な対応との間に生じる齟齬を生じさせている。特に、訪問介護業務のケアワーカーはスマートフォンのアプリによって業務管理されているが、それは訪問介護先での突発的な状況によって常に逸脱する可能性をはらんでおり、それが現場にストレスをもたらしている。一方で、マネジリアリズムを実現するためのICT技術は、こうした齟齬を技術革新によって乗り越えようとしている。ケアサービスに関わるベンチャービジネスは、高齢者の抱えるリスクを予測する技術を推し進めることで訪問介護における業務計画からの逸脱を防ごうとしているが、その試みの成否は不透明である。

一方で、親族介護においては様々な関係性や生活状況に応じたケアに対して複数のチャンネルからの支援が行われていることが見えてきた。さらに、それぞれの**地域独自のケアスケープ**の中で、高齢者たちは住宅の運用と居住を通じて生活を編成していること、家族/親族をめぐる境界もまた住宅を通じて実践されていることが明らかになってきた。

つまり、民営化と私事化という二種類の変化が進行するプライベートな領域において、それぞれ**標準化と多様化という逆のベクトルの変化が進行**していることがわかってきた。また、高齢者ケアをめぐる公私の境界については、交通インフラや住宅計画のような、高齢者ケア制度とは直接かかわらない要因も決定に関わっている。さらに、高齢者ケアに関わる家族の私事化、公的制度の民営化は、利用者/ケアの受け手である高齢者自身だけではなく、家族や親族、ケアワーカーや管理職といった高齢者を取り巻く人々の価値観や行動論理にも変容を迫っているということが明らかになった。

以上のような調査結果を踏まえ、計5年間(助成期間の延長のため)の研究成果として、19件の口頭発表(うち国際学会12回)、図書9件(うち単著1冊、英文1件)、雑誌論文3件の成果発表を行った。

【1 研究目的、研究方法など(つづき)】

公的ケアサービスの現場におけるマネジリアリズムの浸透については、まず初期の調査データを元に「最適化されたケア - フィンランドの社会サービス改革と“市民 消費者”の浮上」と題する章を『ケアが生まれる場：他者とともに生きる社会のために』（森明子編、ナカニシヤ出版、2019年）に執筆している。その後の調査データについては、共同研究を行っているフィンランドのCoE AgeCareグループのMid-Term Congress ‘Longer lives, better care?’において、最新の成果発表を行った。これは、日本語でも「即興と逸脱：フィンランドの訪問介護サービスにおけるマネジリアリズムの社会技術的編成」（日本文化人類学会第57回研究大会）と題する個人発表を行っている。

また、ケアの私事化については、“Publicly Privatised: Relative care support and the neoliberal reform in Finland.”と題する文章を、論集『Managing Chronicity in Unequal States: Ethnographic perspectives on caring』（Laura Montesi・Melania Calestani編、UCL Press、2021年）に執筆した。これは親族介護支援制度における介護者の認定過程がケアをめぐる地域的な不平等をどのように補っているのか、その実践自体が家族・親族の在り方をどのように形作っているのかを考察する内容である。さらに、高齢者の転居と次世代への相続を通じて世代間の相互扶助については、European Association of Social Anthropologists' (EASA) Age and Generations Network (AGENET) conference (2024)をはじめとする国際学会で発表を試み、議論を進めてきたほか、国立民族学博物館特別研究プロジェクト「不確実性の時代における家族の潜勢力 モビリティ、テクノロジー、身体」の国際シンポジウム(2024)において、家族・親族の周辺領域における介護実践とそれを支える行政の取り組みから、家族の個人化概念を拡張する試みについて口頭発表を行った。さらに、『ひとりで暮らす、ひとりを支える』（青土社、2019）と題した民族誌を単著として出版し、私事化と民営化が同時に進展する高齢者ケアの現状について描写・分析した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Suwa Sayuri, Tsujimura Mayuko, Kodate Naonori, Donnelly Sarah, Kitinoja Helli, Hallila Jaakko, Toivonen Marika, Ide Hiroo, Bergman-K?rpijoki Camilla, Takahashi Erika, Ishimaru Mina, Shimamura Atsuko, Yu Wenwei	4. 巻 91
2. 論文標題 Exploring perceptions toward home-care robots for older people in Finland, Ireland, and Japan: A comparative questionnaire study	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Archives of Gerontology and Geriatrics	6. 最初と最後の頁 104178 ~ 104178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.archger.2020.104178	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 高橋絵里香	4. 巻 13
2. 論文標題 ひとり生きるために：ケアされる自由のエスノグラフィ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 92 - 96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ide Hiroo, Suwa Sayuri, Akuta Yumi, Kodate Naonori, Tsujimura Mayuko, Ishimaru Mina, Shimamura Atsuko, Kitinoja Helli, Donnelly Sarah, Hallila Jaakko, Toivonen Marika, Bergman-K?rpijoki Camilla, Takahashi Erika, Yu Wenwei	4. 巻 116
2. 論文標題 Developing a model to explain users' ethical perceptions regarding the use of care robots in home care: A cross-sectional study in Ireland, Finland, and Japan	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Archives of Gerontology and Geriatrics	6. 最初と最後の頁 105137 ~ 105137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.archger.2023.105137	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 3件／うち国際学会 13件）

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 The Meaning of 'Emergency': Communication via 'safety phone' under the neoliberal reform in Finland.
3. 学会等名 16th EASA (European Association of Social Anthropologists) Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1 . 発表者名 Erika Takahashi
2 . 発表標題 Imagining/dis-imagining the future of my home Uncertainty in Finnish older adults ' housing trajectories '
3 . 学会等名 IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) 2020 (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Erika Takahashi and Helena Ruotsala
2 . 発表標題 Staying Home until the End: Rural carescapes in the time of neoliberal shift of Finnish welfare state
3 . 学会等名 SIEF (The International Society for Ethnology and Folklore) 2021, 15th Congress. (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Mayuko Tsujimura, Sayuri Suwa, Naonori Kodate, Sarah Donnelly, Helli Kitinoja, Jaakko Hallila, Marika Toivonen, Camilla Bergman-Karpijoki, Erika Takahashi, Hiroo Ide, Mina Ishimaru, Atsuko Shimamura, Wenwei Yu
2 . 発表標題 Exploring perceptions toward home-care robots for older people in Japan: a comparative study
3 . 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Erika Takahashi. Shahnaj Begum
2 . 発表標題 Sentinels of Lands and Sea : Impacts of the environmental changes on the daily lives of older adults in Finland.
3 . 学会等名 IUAES (International Union of Anthropological and Ethnological Sciences) Inter-congress 2021. (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 Amalgamation of public/private spheres in eldercare.
3. 学会等名 Centre of Excellence in Research on Ageing and Care, Winter School (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 The Unoptimized Care at Home: The socio-technical articulation of managerialism in a rural/suburban eldercare sector.
3. 学会等名 CoE AgeCare Mid-Term Congress 'Longer lives, better care?' (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 The Nationalisation of the "Sea Way": A political campaign by private road associations in Finland.
3. 学会等名 European Association for Social Anthropologists 2022 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 The Outskirts of Families: The relative care supports and the individualization of kinship in Finland.
3. 学会等名 国立民族学博物館特別研究プロジェクト: Family Potential in Uncertain Times: Mobility, technology, and body. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 Navigating the Edge of the Welfare State: The private road ferries and the political campaign for their nationalisation in Finland.
3. 学会等名 Finnish Anthropological Congress 2023 (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Erika Takahashi, Outi Jolanki
2. 発表標題 Summer cottages as a nexus of multigenerational social relations.
3. 学会等名 Centre of Excellence in Research on Ageing and Care, Summer School (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Erika Takahashi, Outi Jolanki
2. 発表標題 More than Home: The collective practice around Finnish summer cottages as a critical element in kinning/de-kinning.
3. 学会等名 European Association of Social Anthropologists' (EASA) Age and Generations Network (AGENET) conference. at Ca Foscari University, Venice, Italy. (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Erika Takahashi
2. 発表標題 The Protective Wall for/against the Old Age: Deconstructing ageism in post-pandemic Japan
3. 学会等名 The Association for Anthropology and Gerontology, and the Life Course (AAGE) in Santa Fe, NM; United States. (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 高橋絵里香
2. 発表標題 住むことと老いること - フィンランドにおける住宅、親子関係、ケア
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋絵里香
2. 発表標題 個人的な住宅 - ハウジングにみるフィンランドの世代間関係
3. 学会等名 比較家族史学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋絵里香
2. 発表標題 独居支援からみる北欧型福祉国家フィンランド
3. 学会等名 第 9 回学習院大学ブランディング・シンポジウム 第 28 回生命科学シンポジウム 超高齢社会を考える V <今、問い直す高齢期の well-being>（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋絵里香
2. 発表標題 海上の私道 フィンランドのフェリー公営化運動にみる「行政」の外縁
3. 学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋絵里香
2. 発表標題 即興と逸脱：フィンランドの訪問介護サービスにおけるマネジリアリズムの社会技術的編成
3. 学会等名 日本文化人類学会第57回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 高橋絵里香
2. 発表標題 パンデミックの天候 世界：コロナ禍のフィンランドにおける大気＝雰囲気醸成と森への退却
3. 学会等名 「感染症の人間学：COVID 19が照らし出す人間と世界の過去・現在・未来」（科学研究変革領域B）ウェビナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 Erika Takahashi	4. 発行年 2021年
2. 出版社 UCL Press	5. 総ページ数 20
3. 書名 “Publicly Privatised: Relative care support and the neoliberal reform in Finland.” in Managing Chronicity in Unequal States: Ethnographic perspectives on caring. Laura Montesi, Melania Calestani (eds.)	

1. 著者名 Erika Takahashi, Ikuko Murakami	4. 発行年 2024年
2. 出版社 NERKA GRUP	5. 総ページ数 29
3. 書名 "Karar / Mudahalenin Sosyal Bicimleri: Finlandiya ' da Demansli Yasililar icin Toplum Refahinin Duzenlemelerinden Duusuunceler." in Yerinde Yaslanma. Murakami, I. (ed.)	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 11
3. 書名 「親族と名前 - 関係している状態を作るもの」『文化人類学の思考法』松村 圭一郎、中川 理、石井 美保（編）	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 15
3. 書名 「最適化されたケア - フィンランドの社会サービス改革と“市民 消費者”の浮上」『ケアが生まれる場 他者とともに生きる社会のために』森明子（編）	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青土社	5. 総ページ数 256
3. 書名 ひとりで暮らす、ひとりを支える フィンランド高齢者ケアのエスノグラフィー	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 12
3. 書名 「エイジングの人類学」『「人新世」時代の文化人類学』大村敬一・湖中真哉（編）	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2020年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 15
3. 書名 「医療とケアの民族誌」 『「人新世」時代の文化人類学』大村敬一・湖中真哉（編）	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2021年
2. 出版社 日本経済評論社	5. 総ページ数 23
3. 書名 「個人的な住宅 ハウジングにみるフィンランドの世代間関係」 『家族のなかの世代間関係』（小池誠・施利平 編）	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2021年
2. 出版社 河出書房新社	5. 総ページ数 11
3. 書名 「言葉にならない気持ちをフィールドワークする」 『「心」のお仕事：今日も誰かのそばに立つ24人の物語』	

1. 著者名 高橋絵里香	4. 発行年 2023年
2. 出版社 学習院大学	5. 総ページ数 15
3. 書名 「《第三講演》独居支援からみる北欧型福祉国家フィンランド」 『生命科学と社会問題の多面的議論 生命社会学シンポジウム記録集』生命・情報・社会学講座（編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------